

## 第7分科会

# 授業アンケートと教育の個性化

報告者

**佐藤 賢一**（京都産業大学 総合生命科学部 教授）

**岡本 信照**（京都外国語大学 外国語学部 スペイン語学科 准教授）

**山下 恵子**（宮崎学園短期大学 学長補佐 教授）

**山田 剛史**（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 准教授）

コーディネーター

**耳野 健二**（京都産業大学 法学部 教授）

参加人数

**120名**

授業アンケートの運営や活用については、どの大学でも苦勞されていると思われる。他方で、各大学には、三つの基本方針の策定、あるいは「機能分化」「個性化」といった掛け声のもと特色ある教育プログラムの開発・実施が求められている。授業アンケートは、このような教育の個性化の要請といかなる関係にあるのだろうか。そこで、本分科会では、授業アンケートを中心に据えつつも、質保証のシステム全体のなかでアンケートをどう位置付けるかという視点から、この問題を考えてみたい。ここには、シラバスやルーブリックといった授業のあり方に直結する事柄から、大学組織のガバナンスといった多様な問題がかかわってくる。そしていずれもが、きわめて難しい問題でありながら、大学改革のために避けて通ることのできない問題でもある。そのため、本分科会では、幾つかの事例の紹介に加え、大学 IR の専門家に加わっていただき、課題の整理と意見交換をおこないたい。



## 授業アンケートと教育の個性化

授業アンケートとは一体何のために実施されるのだろうか。今日では、授業アンケートはほとんどの大学ですでに実施され、FDの基本的なツールとして定着しているといっよいであろう。しかしそれは、いかなる意味で授業改善や教学改革に役立っているのだろうか。

もちろん、多くの大学で実施されている授業アンケートが無意味だとか無駄だというわけではない。それどころか、幾つもの教育現場において、多くの心ある先生方の努力で、授業アンケートは有効に活用され、そしてそれが幾人もの学生の学ぶ喜びを生み出しているであろうことは、想像に難くない。

それにもかかわらず、大学教育をとりまく環境がますます厳しくなり、教学改革のいっそうの推進が声高に叫ばれるなか、膨大なエネルギーを注入して実施される授業アンケートが、その組織的労力に見合った効果をもたらしていると実感できるかという、疑問を感じる向きも少なくないのではないだろうか。

そこで、本分科会は、多くの大学関係者の方々にとっても関心の高いと思われる授業アンケートを、これまた多くの大学にとって教学改革の根幹の問題である「質保証」と結び付けて考える、というテーマを設定した。

ここで、「質保証」という言葉を正確に説明する能力は筆者にはない<sup>1)</sup>。しかしながら、ここでは一応次のようにこれを理解しておきたい。すなわち、各大学は、各々の「建学の精神」ないし「大学ミッション」を明らかにし、それに基づき、学士課程としての教育課程を編成する。そのさい、いわゆる三つの方針を策定し、教育課程の入り口、カリキュラム、出口を設計し、全体として整合的な教育体系を構築する。そしてそれを、学長のイニシアティブの下、教学ガバナンスを効かせた形で実地に運用しつつ、なおかつこれに対してPDCAサイクルによる検証を実施する。大学にはこのような一連のシステムの構築とその実地運用が求められ、これらを通じて、大学は学生が一定の水準に見合った学修成果を達成していることを社会に示

す必要がある。このように、大学が一定の水準をクリアした教育を提供していること、なおかつ提供するための仕組みを整えていることを、ここでは「質保証」という言葉で理解しておく<sup>2)</sup>。

では、このようなシステムのなかで、授業アンケートとはいったいどのような位置づけにあるのだろうか。広く普及した授業アンケートの効果が今一つはっきりしないように感じられるのは、この点の整理が実は十分ではないからではないだろうか。問題そのものが難しい問題であるため、明確な解決を直ちに得ることは難しいかもしれないが、問題の整理をおこなうことで、今後の各大学の教学改革の展開への示唆を得ることができれば、それは大きな意味があると思われる。

このような問題意識を大きな枠として設定したうえで、本分科会では、以下の三つの事例報告ならびに事例に対するIR専門家のコメントによりディスカッションをおこなった。

### 1. 事例報告1：京都産業大学・佐藤賢一氏

最初の報告は、おおよそ三つの内容をもつ。第一は、京都産業大学における授業アンケートの実践である。第二は、報告者自身の授業実践における授業アンケートの活用事例の報告である。第三は、授業アンケートを支える各種の施策の紹介である。

第一点に関連して報告されたように、京都産業大学では、二種類の授業アンケートが実施されており、それぞれ「対話シート」と「学習成果実感



調査」と呼ばれている。この点をふまえ、報告では、前者の「対話シート」についての報告者自身の実践例（腫瘍生物学、発生生物学）が紹介された。その上で、授業アンケートを、成績評価もふくめて学生授業全体をトータルに振り返るためのツールとして活用することはできないか、というアイデア（「未来イメージ」）が提案された。

## 2. 事例報告2：京都外国語大学・岡本信照氏

二番目の報告は、昨年（2013年）京都外国語大学において実施された授業アンケートの改訂の概要を報告するものである。改訂前のアンケートの紹介とその問題点の析出、それを踏まえたうえでの改定方針の策定、そしてその改定方針に基づく新たな授業アンケートの各設問の設計、これら一連のプロセスを非常に丁寧に御説明いただいた。

まず京都外国語大学における現行の授業アンケートの概要が紹介されたのち、問題点が紹介された。授業アンケートにおいて、「担当教員のモラルを問うことに今更意味があるのか?」、あるいは「担当教員個人の力量に帰されない問いは理不尽では?」、等である。そこでこれらをふまえ、新たにアンケート設計の原則（8つの原則を含む）を設定し、アンケートの改訂を試みたことが示された。報告では、新旧のアンケート両方の書式を対比的に御披露いただき、改訂による変化がよく分かるものとなった。

## 3. 事例報告3：宮崎学園短期大学・山下恵子氏

三番目の報告は、宮崎学園短期大学で実施されている質保証システムの紹介を中心に、その中での授業アンケートの位置づけについてふれる、という内容であった。

具体的には、まず「日本一の地方短大」を目指すという高い志をもってはじめたFD活動の紹介から始まり、そのなかでの授業アンケートの役割、あるいは、建学の精神「礼節・勤労」を起点としておこなわれたDPの評価指標の策定（全学、学科）、それに基づくルーブリックの作成、さらにそのシラバスへの落とし込みなど、が紹介された。今後の課題としてはIR体制の構築があげられた。教職員が一丸となった活発なFD活動の有様と、「建学の精神」を出発点として精緻かつ意欲的に作りこまれた質保証の仕組みは、多くの参加者に強い感銘を与えたものと思われる。

## 4. コメント：愛媛大学・山田剛史氏

以上三つの事例に報告をふまえ、IR専門家の立

場から問題点の解説と各事例へのコメントをいただいた。以下、筆者が理解しえたかぎりでの要点を記しておく。

現在ひろく要請されているのは、学修成果やDP等の出口のデザインから逆算する形でカリキュラムを設計することである（バックワード型の教育デザイン）。この考え方に沿うならば、授業アンケートも、そのように設計されたカリキュラム内の授業の到達度を問うためのツールとして位置づけなおす必要がある。

このような場合に重要なのは、組織のかかげる学修目標をふまえつつ、カリキュラムのデザインを考えることである。そのさい、カリキュラムと個々の授業の関係等につき、個人レベルと組織レベルとの相互のやりとりのなかで、情報共有や再検討をおこなうことが必要である。

質保証の仕組みは基本的にこのような形で構築することが推奨されており、したがってこのなかで授業アンケートを組み込むとすれば、このようなバックワード型のカリキュラムに沿う形で組み込むことになる。このような場合、個々の教員の授業改善のレベルにとどまらず、カリキュラム全体、教学体系全体との整合性や結びつきを自覚的に検討する必要が出てくる。

もっとも、授業アンケートを質保証の一部とする考え方自体を取らない、という選択肢もありうる。すなわち、授業アンケートを個々の教員の授業スキルアップのツールにとどめることも、一つの考え方としては成り立ちうる。

これらの一般論を踏まえて、各事例について以下のようなコメントがなされた。

佐藤氏の報告について。報告に関わるキーワードとして「対話」があげられる。報告中に示された授業実践でもそれはうかがえる。さらに掘り下げるべき点として、「対話シート」と「学習成果実感調査」との関連性について何か成果はないか、これら二種類の授業アンケートをカリキュラム改



善に活用した例はないか、等があげられた。

岡本氏の報告について。キーワードとして「原則」があげられる。現行の授業アンケートの見直しを、問題点のきちんとした分析を踏まえて改善のための「原則」を立てる形でおこなっている。しかもそこには、学習者の視点、学生自身のふりかえりのためのツールとしての性格が盛り込まれており、こうした点に特徴がみられる。さらに掘り下げるべき点として、新たなアンケートの結果を組織レベルでどのように活用するのか、という問題があげられた。

山下氏の報告について。キーワードは「指針の共有」である。建学の精神を起点とした質保証の仕組みが全体として綺麗にデザインされているのに加え、学生の顔写真を覚えるなど、ユニークなFD活動を展開している。さらに掘り下げるべき点としては、このような精緻に作られたシステムを具体的にどのように現実化してゆくか、という点があげられる。

## 5. おわりに

三つの事例報告は、いずれもそれぞれの立場からのユニークなものであり、異なる形で授業アンケートの「いま」をあぶりだすことができていたと思われる。これに対して、山田氏は詳細なモデル図<sup>3</sup>を用いつつ、これら三つの事例の特徴や課題をきわめてシャープな形で明らかにしてくださった。具体的な事例を基にさまざまな問題点を明らかにしていただいたおかげで、報告した三大学はもとより、フロア参加者の方々にも、きわめて実り多い時間になったのではないだろうか。

さきに述べたように、「授業アンケートと教育の個性化」というテーマは、それ自体として非常に難しいものであり、もともと何らかの明確な解答をもとめることは難しい。大枠の問題点の整理がなされ、参加者各自がそれぞれの課題について何等かのヒントや手がかりを得られれば、本分科会は成功だといえる。そして、参加者の皆さんのご協力のおかげで、この目的は達成できたように思う。

コーディネートを担当した筆者にとっては、バックワード型のカリキュラム構築の手法（質保証）と授業アンケートの結びつきをどう考えるかという点に問題の核心がある、ということが確認できたことが、なによりの収穫であった。

なお分科会当日は、各事例報告者とコメントータに対して多数の質問が寄せられ、活発なディスカッションをおこなうことができた。その逐一を紹介することはできないが、質問をお寄せくださった方々にお礼を申し上げるとともに、司会の不手際ですべての質問にお答えできなかったことをお詫びしたい。

最後になったが、お忙しいなか長時間にわたりご協力くださった佐藤氏、岡本氏、山下氏、山田氏に、改めて御礼申し上げたい。

- 1 たとえば、中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」（平成17年）には次のような文言がみられる。「本来、保証されるべき「高等教育の質」とは、教育課程の内容・水準、学生の質、教員の質、研究者の質、教育・研究環境の整備状況、管理運営方式等の総体を指すものと考えられる。したがって、高等教育の質の保証は、行政機関による設置審査や認証評価機関による評価（…〔中略〕…）のみならず、カリキュラムの策定、入学者選抜、教員や研究者の養成・処遇、各種の公的支援、教育・研究活動や組織・財務運営の状況に関する情報開示等のすべての活動を通して実現されるべきものである。…〔中略〕… 高等教育の質の保証を考える上では、教員個々人の教育・研究能力の向上や事務職員・技術職員等を含めた管理運営や教育・研究支援の充実を図ることも極めて重要である。評価とファカルティ・ディベロップメント（FD）やスタッフ・ディベロップメント（SD）等の自主的な取組との連携方策等も今後の重要な課題である。」（21-22頁）
- 2 質保証の仕組みをこのようにとらえるとき、教学の営みは、全体として「建学の精神」ないし「大学ミッション」に導かれる形で実施されると考えられる。ここから、質保証の仕組みは、各大学における教育の「個性化」を実現するための手段としても捉えることができると考え、本分科会のタイトルには、「教育の個性化」の語を用いた。
- 3 2013年度第19回FDフォーラム「社会を生き抜く力を育てるために」〈レジュメ・資料集〉（大学コンソーシアム京都）、7-18頁

大学コンソーシアム京都 第19回FDフォーラム  
第7分科会  
**授業アンケートと教育の個性化**

佐藤賢一 (京都産業大学 総合生命科学部 教授)  
岡本信照 (京都外国語大学 外国語学部 スペイン語学科准教授)  
山下恵子 (宮崎学園短期大学 学長補佐 教授)  
山田剛史 (愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 准教授)

コーディネーター  
耳野健二 (京都産業大学 法学部 教授)

### 問題提起

★授業アンケートの難しさ

FDのツールとして定着。しかし、

「実施はしているんだけど・・・」

- －実施する意味が本当にあるのか？
- －どのように変えればいいのか？
- －そもそもアンケートの目的は何か？
- －大学改革や教学改革との関係は？

### 問題提起

- 授業改善とどのように関連するのか？
- 組織的FDやカリキュラム改革とどのように関連するのか？
- 教育の「質の保証」とどのように関連するのか？
- 大学の「建学の精神／ミッション」との関係は？

10:00-10:10	10分	【開会・趣旨説明】耳野健二
10:10-11:00	50分	【第1報告】京都産業大学・佐藤賢一 「授業アンケートがわたしたちを変える、わたしたちが授業アンケートを変える」 (報告40分、フロアと質疑応答10分)
11:00-11:50	50分	【第2報告】京都外国語大学・岡本信照 「授業評価アンケートから授業アンケートへ～京都外国語大学の取り組み～」 (報告40分、フロア質疑応答10分)
11:50-12:00	10分	フロア質問用紙記入および時間調整
12:00-13:30	90分	昼食、ポスターセッション、 質問用紙回収(事務局)

13:30-14:20	50分	【第3報告】宮崎学園短期大学・山下恵子 「建学の精神「礼節・勤労」に基づいた新たな質保証システムの構築」 (報告40分、フロアと質疑応答10分)
14:20-14:40	20分	【各事例へのコメントおよび解説】 愛媛大学・山田剛史
14:40-14:50	10分	休憩・質問用紙回収 壇上の設営(事務局)
14:50-15:30	40分	コメントに対する各報告者のリプライ(10分) フロアとの質疑応答(全体討論)(30分)

# 授業アンケートがわたしたちを変える、わたしたちが授業アンケートを変える

京都産業大学 総合生命科学部 教授 佐藤 賢一



平成26年2月23日 (日)  
 大学コンソーシアム京都  
 第19回FDフォーラム 第7分科会「授業アンケートと教育の個性化」

## 授業アンケートがわたしたちを変える、わたしたちが授業アンケートを変える

京都産業大学 総合生命科学部・教育支援研究開発センター  
 佐藤 賢一

本取組みに共に取り組み、あるいは関係された方々

学長室スタッフ(教育支援研究開発センター)  
 森 洋、山内 尚子、藤原 めぐみ、森脇 可奈子、松井きょう子  
 久野みのり、中澤 正江\*、王 戈\*(\*現在は別部署に所属)

法学部教授・学長特命補佐  
 耳野 健二(本分科会コーディネータ)

腫瘍生物学・発生生物学・応用特別研究の履修生など

京都産業大学の授業アンケートには学期末に実施される「学習成果実感調査」と授業前半部に実施される「教員と学生の対話シート」の二種類がある。これらは平成23年度から全学的に実施されるようになった。本報告のはじめの約3分の1[下記1]では、京都産業大学における授業アンケートの変遷(紆余曲折)と現状(現行の授業アンケートはどのようなものか)について紹介する。次の3分の1[下記2]では実際の授業内容と授業アンケートの関係について報告者の実践事例を紹介する。授業アンケートをとおして学生が感じ考えていることがわかるいっぽうで、教員は何を感じ考えたのか。報告者の思いをお伝えするとともに、分科会ご参加のみなさんにも問いかけたい。さいご[下記3]に現行の授業アンケートが抱えている課題、すなわち「授業アンケートをどう活用していくか、今後どうあるべきか」について、その発見・共有・解決にかかる京都産業大学での取組みの現状を紹介する。授業アンケートは教育の質保証の観点から大学の組織的な取組みとして重要である半面、教員一人一人が授業の現場で学生と向き合うための取組みとしての重要性がある。報告者は授業アンケートにかかる取組みが大学と教員のあいだをつなぐFD(ファカルティ・デヴェロップメント)の要素を多分にもつことを実感しつつ、授業アンケートが教員の教育力の向上だけでなく最終的には学生の主体的な学びをうながすしくみの一つとして機能させることができないかと考えている。授業アンケートが報告者のFDに大きく深く寄与していることを締めくくりの話題提供とさせていただきます。

### 京都産業大学における授業アンケートの変遷と現状

担当授業のアンケートをとおして知る学生の感じ方や考え方、わたしが考えたこと

授業アンケートの活用と将来像

私自身のこれまでの試行錯誤を通して考えてみます

#### [1] 京都産業大学の授業アンケート

背景: 過去10数年における授業アンケート制度の変遷  
 現状: 対話シート(Aアンケート)と学習成果実感調査(Bアンケート)  
 授業コンテンツ\*1とアンケートの関係

\*1シラバス、初回授業、授業前半、授業後半、試験・成績評価など

#### [2] 報告者の実践事例

発生生物学(基礎専門科目・必修)と腫瘍生物学(応用専門科目・選択)  
 授業形式および内容\*2とアンケート結果の関係

\*2講義型と対話型、予習と復習、教科書の知識と時事問題など

#### [3] 授業アンケートにおける課題の解決むけた京都産業大学の取組み

課題を発見する(例: 学部からの報告書、教育支援セでの議論など)

課題を共有する(例: 学部まわり、FDSD推進WG、各種研修会など)

課題を解決する(例: 教務・カリキュラム、高等教育調査・研究WGなど)

#### [1] 京都産業大学の授業アンケート

背景: 過去10数年における授業アンケート制度の変遷  
 現状: 対話シート(Aアンケート)と学習成果実感調査(Bアンケート)  
 授業コンテンツ\*1とアンケートの関係

\*1シラバス、初回授業、授業前半、授業後半、試験・成績評価など

平成12～22年度 授業の相互評価アンケート

▽  
 教員の不信感

実施率と回答率の伸び悩みと低下

「良い授業」に対する教員と学生の考え方のギャップ

アンケート結果のフィードバックの時期と方法

▽  
 平成23年度秋学期～ 2種類の授業アンケート

① 教員-学生間の授業に関する対話シート ② 学習成果実感調査

[1] 京都産業大学の授業アンケート

背景: 過去10数年における授業アンケート制度の変遷

現状: 対話シート(Aアンケート)と学習成果実感調査(Bアンケート)

授業コンテンツ\*1とアンケートの関係

\*1シラバス、初回授業、授業前半、授業後半、試験・成績評価など

新制度に改訂する上での2つのポイントと3つの活用レベル

① 名称を変更する ② 学期内に2種類実施する

学期内に学生に結果をフィードバックする(現場レベル)

学部独自設問を設定し、その結果を分析・活用する(学部レベル)

各学部の取組状況をホームページ上で公開・共有する(全学レベル)

[1] 京都産業大学の授業アンケート

背景: 過去10数年における授業アンケート制度の変遷

現状: 対話シート(Aアンケート)と学習成果実感調査(Bアンケート)



(1) 授業理解  
(2) 授業への興味  
(3) 授業技術

① 教員の話し方  
② 授業の進め方  
③ 授業の進む速さ  
④ 板書やパワーポイント資料  
⑤ 教材(教科書やプリント)  
⑥ 音響・映像資料  
⑦ 私語対策  
⑧ 教員と学生のコミュニケーション  
⑨ 学生どうしのコミュニケーション

(4) 自由記述

※学生と対話することが目的であるため、シートは教員側目で作成したものを使用してもよい。

[1] 京都産業大学の授業アンケート

背景: 過去10数年における授業アンケート制度の変遷

現状: 対話シート(Aアンケート)と学習成果実感調査(Bアンケート)

全学統一設問と学部・教員独自設問

全学統一設問	学部独自設問									
	学生の成長・姿勢に関すること					授業環境				
授業準備	授業の目的の明確化	授業の進め方	授業の進み具合	授業の振り返り						

教員の教壇生活		カリキュラム		教員独自設問		自由記述	
授業準備	教壇生活の工夫	授業の進め方	授業の進み具合	授業の振り返り	授業の振り返り	授業の振り返り	授業の振り返り

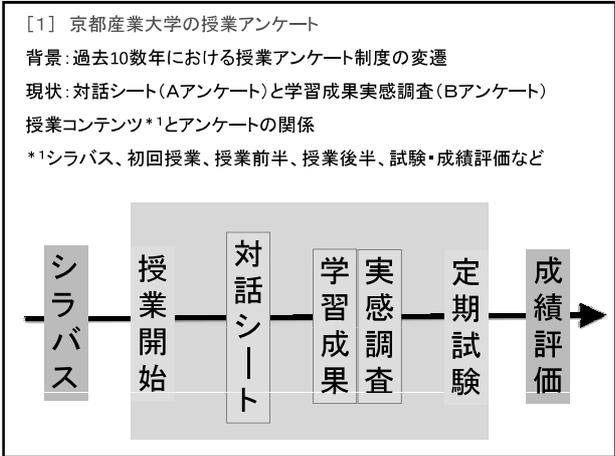
[1] 京都産業大学の授業アンケート

背景: 過去10数年における授業アンケート制度の変遷

現状: 対話シート(Aアンケート)と学習成果実感調査(Bアンケート)

学部ごとの実施方針

①初年次導入科目の充実のための現状把握	①学生による自分の成長実感に関する自己評価の明確化
②大人教職科目の魅力向上	②教員の授業改善に活用
③外部評価の指摘事項(系統的学修への取組)に関連して、学生の科目選択理由の経年変化を把握	授業に関する学生からの意見を継続的に受ける
④学生の各科目と全体の学習時間数を把握し、授業改善に役立てるデータをとる。	全教員(非常勤講師含む)担当科目のうち、最低1科目
⑤履修科目の、授業環境、卒業生とのコミュニケーション、事前・事後学習、理解度・満足度を調査	※学部開設2年目で全ての科目を開講していない
	新入生の日本語能力向上という観点から受講生のニーズ等を把握する
	③「健康科学実習」と「スポーツ科学実習」履修者との関連性を探る



ここで考える2つのこと

学習成果実感度と成績評価の関係  
(学生にとっての客観的要素の導入)

学習成果を含む授業全般の振り返り  
(教員による指導成果の振り返り)

指導成果を振り返ろう！

↓

ではどのように振り返るのが良いか？

↓

まずはデータが必要

↓

授業の実施状況、アンケート、成績・・・

↓

必要と思われる事柄・データはなにか！？  
みなさん、所定のシートに書き出してみてください！

[2] 報告者の実践事例

発生物学(基礎専門科目・必修)と腫瘍生物学(応用専門科目・選択)

授業形式および内容\*2とアンケート結果の関係

\*2講義型と対話型、予習と復習、教科書の知識と時事問題など

総合生命科学部・生命システム学科の学び

1年次: 導入・基礎専門科目、実習・演習・英語

2年次: 基礎専門科目、実習・演習・英語

3年次: 応用専門科目、実習・演習・英語、基礎特別研究

4年次: 応用特別研究(卒業研究)

[2] 報告者の実践事例

発生物学(基礎専門科目・必修)と腫瘍生物学(応用専門科目・選択)

授業形式および内容\*2とアンケート結果の関係

\*2講義型と対話型、予習と復習、教科書の知識と時事問題など

基礎専門科目(必修)

物質生物学、代謝生物学、分子生物学、細胞生物学  
遺伝子工学、発生物学

応用専門科目(選択)

免疫学、細胞情報システム学、構造生物学、神経生物学  
再生システム学、薬理学、\*\*、腫瘍生物学

科目名	腫瘍生物学	所属学部等	総合生命科学部	配当年次	3年次	単位数	2単位
開講期	春学期	担当	佐藤 晋一				
授業概要 / Course outline	悪性腫瘍または癌(がん)と総称される疾患の基礎生物学(発がん、悪性化の分子生物学)および臨床医学生物学(各種がんの特徴、抗がん戦略、がん疫学など)を扱います。がん研究は、ウイルス由来の発がん遺伝子と正常細胞由来の原がん遺伝子の発見などを中心に、疾患研究の枠を超えて広く細胞機能の研究の重要な柱として位置づけられています。すなわち、がんを理解することは、多細胞生物が持つ生命システムの正常な働きと癌たんの理解することであるという認識が持たれるようになっていきます。講義では、がんとは何か、そして、がん研究の歴史的背景、現在進行形の研究最前線、そして未来像を学習・考察します。						
授業内容・授業計画 / Course description・plan	1. イントロダクション 2. DNA、遺伝子、染色体の構造・安定性とがん						
中 略							
15. まとめの試験	(項目が必ずしも1コマの授業に対応するわけではなく、順番も相前後することがあります)						
準備学習等(事前・事後学習) / Preparation and assignments	事前学習用として授業内容を反映した印刷物(レジュメ)を配布します。このレジュメは授業中の内容把握と事後学習にも有効です。事後学習用には、図表を含む印刷物(おさらいシート)や試験対策用のキーワード集などを配布します。授業中にこれらの配布物を演習の材料として使うことがあります。						
授業の到達目標 / Expected outcome	現在の日本では癌が死亡原因の1位であり、その克服に向けた臨床研究と応用の進展は火急の課題です。一方で癌の基礎生物学的研究は、細胞が持つさまざまな生理機能とその破綻がもたらす影響を私たちに教えてくれます。がんをはじめとする疾患研究が、このように基礎レベルと臨床レベルが有機的に結びつき発展していく、その流れの全体像をつかんでもらいます。						
身に付く力 / Special abilities to be attained	論理的思考力(主に学習力)、態度・志向性(主に規律性)						
履修上の注意 / Special notes, cautions	特にありません。						
評価方法 / Evaluation	平常点(授業への参加度合い、講義や演習への取り組みなど)30-10% まとめの試験(筆記試験)70-90%						
教 材 / Text and materials							

中 略

15. まとめの試験  
(項目が必ずしも1コマの授業に対応するわけではなく、順番も相前後することがあります)

準備学習等(事前・事後学習) / Preparation and assignments  
事前学習用として授業内容を反映した印刷物(レジュメ)を配布します。このレジュメは授業中の内容把握と事後学習にも有効です。事後学習用には、図表を含む印刷物(おさらいシート)や試験対策用のキーワード集などを配布します。授業中にこれらの配布物を演習の材料として使うことがあります。

授業の到達目標 / Expected outcome  
現在の日本では癌が死亡原因の1位であり、その克服に向けた臨床研究と応用の進展は火急の課題です。一方で癌の基礎生物学的研究は、細胞が持つさまざまな生理機能とその破綻がもたらす影響を私たちに教えてくれます。がんをはじめとする疾患研究が、このように基礎レベルと臨床レベルが有機的に結びつき発展していく、その流れの全体像をつかんでもらいます。

身に付く力 / Special abilities to be attained  
論理的思考力(主に学習力)、態度・志向性(主に規律性)

履修上の注意 / Special notes, cautions  
特にありません。

評価方法 / Evaluation  
平常点(授業への参加度合い、講義や演習への取り組みなど)30-10%  
まとめの試験(筆記試験)70-90%

教 材 / Text and materials

以下、省略

[2] 報告者の実践事例

発生物学(基礎専門科目・必修)と腫瘍生物学(応用専門科目・選択)

授業形式および内容\*2とアンケート結果の関係

\*2講義型と対話型、予習と復習、教科書の知識と時事問題など

平成24年度までと今年度の授業スタイルに変化をもつ

その結果、どのようなアンケート結果を得てきたか  
評価の高いポイントと低いポイント、低いポイントへの対応  
上記の取組を通じて考えたこと

授業内容のダイジェスト (2013年)

対話シートの結果@腫瘍生物学 (2012年・2013年)

学生が主体的に取り組む演習形式の導入 (2013年)

学習成果実感調査の結果 (2012年・2013年)

演習への学生の反応 (2013年)

従来型の講義形式の授業 (1~5回)

対話シートの実施 (5回)

演習授業タイプ1 (別添資料1、6~7回)

従来型の講義形式の授業 (8~11回)

演習授業タイプ2と振り返り (別添資料2、12~14回)

まとめの試験と学習成果実感調査 (15回)

京都産業大学  
平成24年度 春学期  
「教員 - 学生間の対話シート」

このアンケートは、授業の進め方について、学生との対話を促進することを目的とするものです。なお、このアンケートは成績には一切関係がありませんので、率直な回答をお願いします。※学生証番号は、担当教員の指示がある場合に記入してください。

担当教員名 腫瘍生物学  
科目名  
学生証番号

1. [授業理解]  
この科目の内容をよく理解できていると感じる。  
a. そう思う 14 b. どちらともいえない 27 c. そう思わない 4

2. [授業への興味]  
この科目の内容に学びの面白さを感じている。  
a. そう思う 32 b. どちらともいえない 10 c. そう思わない 2

3. [授業技術]  
以下の各項目のうち、この授業に該当するものについて、「良い」「普通」「改善を希望する」のいずれかに○を記入してください(該当しないものは無回答で結構です)。

	良い	普通	改善を希望する(満足する場合は無回答)
①教員の話し方	24	20	1
②授業の進め方	31	23	1
③授業の進む速さ	32	23	0
④板書やパワーポイント資料	13	30	1
⑤教材(教科書やプリント)	9	34	1
⑥音響・映像資料	27	17	0
⑦私語対策	14	30	0
⑧教員と学生のコミュニケーション	10	33	1
⑨学生どうしのコミュニケーション	8	40	1

4. [自由記述]  
この授業の改善案、疑問点などを自由に記入してください。

回答数 45

京都産業大学  
平成25年度 春学期  
「教員 - 学生間の授業に関する対話シート」

このアンケートは、授業の進め方について、学生との対話を促進することを目的とするものです。なお、このアンケートは成績には一切関係がありませんので、率直な回答をお願いします。※学生証番号は、担当教員の指示がある場合に記入してください。

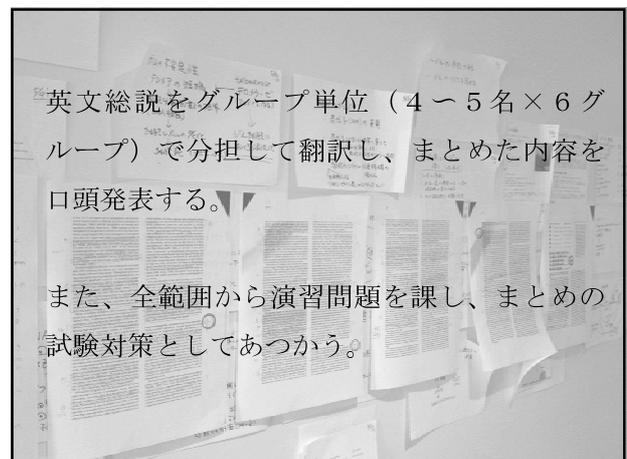
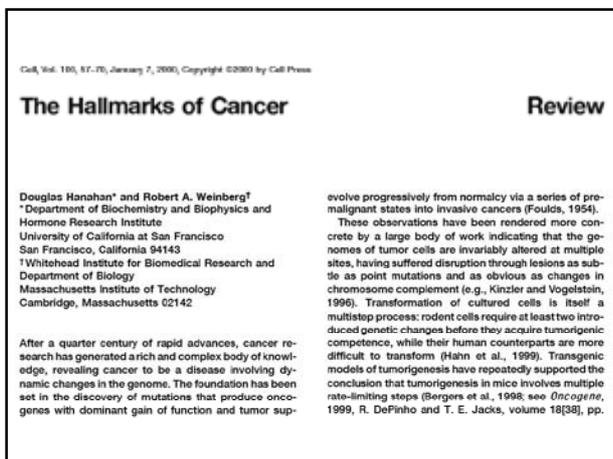
担当教員名 腫瘍生物学  
科目名  
学生証番号

1. [授業理解]  
この科目の内容をよく理解できていると感じる。  
a. そう思う 9 b. どちらともいえない 18 c. そう思わない 0

2. [授業への興味]  
この科目の内容に学びの面白さを感じている。  
a. そう思う 24 b. どちらともいえない 3 c. そう思わない 0

3. [授業技術]  
以下の各項目のうち、この授業に該当するものについて、「良い」「普通」「改善を希望する」のいずれかに○を記入してください(該当しないものは無回答で結構です)。

	良い	普通	改善を希望する(満足する場合は無回答)
①教員の話し方	27	2	( )
②授業の進め方	25	4	( )
③授業の進む速さ	23	6	( )
④板書やパワーポイント資料	25	4	( )
⑤教材(教科書やプリント)	21	8	( )
⑥音響・映像資料	21	8	( )
⑦私語対策	12	15	( )
⑧教員と学生のコミュニケーション	14	12	( )
⑨学生どうしのコミュニケーション	12	13	( )





# 実践事例 まとめ その1

授業内容のダイジェスト (2013年)  
 対話シートの結果@発生生物学 (2012年と2013年)  
 正確な引用に注力した授業構成の導入 (2013年)  
 出席票・テストの毎回提出・採点・返却  
 上記取組への学生の反応 (同上)  
 学習成果実感調査の結果 (2012年と2013年)

シラバスを使ったイントロダクション (1回)  
 授業中の読み書きを毎回点検する授業 (別添資料3、2～5回)  
 試験と振り返り (5～6回)  
 対話シートの実施 (6回)  
 授業中の読み書きを毎回チェックする授業 (7～14回)  
 試験と振り返り (9～10回、14～15回)  
 成績の振り返りと学習成果実感調査 (15回)

京産大 平成24年度 秋学期 「教員—学生間の対話シート」

このアンケートは、授業の進め方について、学生との対話を促進することを目的とするものです。なお、このアンケートは成績には一切関係がありませんので、率直な回答をお願いします。※学生証番号は、担当教員の指示がある場合に記入してください。

担当教員名 発生生物学  
 科目名 発生生物学  
 学生証番号

1. 【授業理解】  
 この科目の内容をよく理解できていると感じる。  
 a. そう思う 32 b. どちらともいえない 41 c. そう思わない 1

2. 【授業への興味】  
 この科目の内容に学びの面白さを感じている。  
 a. そう思う 50 b. どちらともいえない 23 c. そう思わない 2

3. 【授業技術】  
 以下の各項目のうち、この授業に該当するものについて、「良い」「普通」「改善を希望する」のいずれかに○を記入してください。(該当しないものは無回答で結構です)。

	良い	普通	改善を希望する (無回答する場合は無回答)
①教員の話し方	65	13	1
②授業の進め方	55	21	1
③授業の進む速さ	47	26	1
④板書やパワーポイント資料	46	32	1
⑤教材 (教科書やプリント)	45	36	1
⑥音響・映像資料	40	32	
⑦私語対策	37	38	
⑧教員と学生のコミュニケーション	16	47	
⑨学生どうしのコミュニケーション	10	61	

京産大 平成25年度 秋学期 「教員—学生間の対話シート」

このアンケートは、授業の進め方について、学生との対話を促進することを目的とするものです。なお、このアンケートは成績には一切関係がありませんので、率直な回答をお願いします。※学生証番号は、担当教員の指示がある場合に記入してください。

担当教員名 発生生物学  
 科目名 発生生物学  
 学生証番号

1. 【授業理解】  
 この科目の内容をよく理解できていると感じる。  
 a. そう思う 34 b. どちらともいえない 59 c. そう思わない 3

2. 【授業への興味】  
 この科目の内容に学びの面白さを感じている。  
 a. そう思う 40 b. どちらともいえない 48 c. そう思わない 7

3. 【授業技術】  
 以下の各項目のうち、この授業に該当するものについて、「良い」「普通」「改善を希望する」のいずれかに○を記入してください。(該当しないものは無回答で結構です)。

	良い	普通	改善を希望する (無回答する場合は無回答)
①教員の話し方	71	26	3
②授業の進め方	58	40	1
③授業の進む速さ	53	43	3
④板書やパワーポイント資料	70	29	0
⑤教材 (教科書やプリント)	74	20	0
⑥音響・映像資料	61	34	1
⑦私語対策	45	51	0
⑧教員と学生のコミュニケーション	38	58	0
⑨学生どうしのコミュニケーション	41	51	1

【教員独自説明】（担当教員から指示があった場合回答すること）

質問6. 論理的思考力（主に学習力）は身に付いたか。

- 参考資料から引用すべき箇所を見つける力、正確に引用する力。
- 長時間にわたり、読み書きをおこなう力。
- 複数の情報源を用いて、その中にある共通点や相違点を飲み取る力。など。

質問7. 態度・意欲性（主に読解性）は身に付いたか。

- 毎回の授業を機嫌な状態で受けることができるように準備を怠らない。
- 授業中に眠くならない、注意散漫にならない。などの集中継続ができる。
- 授業の前後に必要な学習を定時的に取り組むことができる。など。

質問8. 本授業を受ける前とくらべると、今は主体的に学べるようになったか。

# 実践事例 まとめ その2

[2] 報告者の実践事例: 番外編

研究室における卒業研究指導と授業アンケート  
(やっていないけれど)

総合生命科学部・生命システム学科の学び

1年次: 導入・基礎専門科目、実習・演習・英語

2年次: 基礎専門科目、実習・演習・英語

3年次: 応用専門科目、実習・演習・英語、基礎特別研究

4年次: 応用特別研究(卒業研究)

研究室で学生とルーブリックを作る試み  
(2013年12月26日～2014年1月28日)

教員と学生の対話が活発におこなわれながら、学習成果とは何かについて学生が自ら言語化していく学びのあり方を目指す。

別添資料4

研究室ミーティング	基礎特別研究	学内外のセミナー・イベントなど
諸連絡・情報交換	研究内容に関する講義	松の浦研修会
原著論文セミナー	「細胞の分子生物学」プレゼンテーション	他研究室との交流会・合同セミナー
英文テキスト輪読	合同実験	学内各種セミナー
英文テキスト演習	研究室メンテナンス(カエル)	学外のセミナー・学会・会議
実験進捗レポート	研究室メンテナンス(実験室)	研究室内外の懇親会
週報	個別テーマの選定と事前トレーニング	ミニガイダンス

研究  
単位・卒業  
就職・進学

これらはどのような取り組みなのか？

取り組むことで何が得られるのか？

取り組んだ結果、期待どおりであったのか？

# 実践事例 まとめ その3

[3] 授業アンケートにおける課題の解決むけた京都産業大学の取組み  
 課題を発見する(例:学部からの報告書、教育支援セでの議論など)  
 課題を共有する(例:FSDS推進WG、学部まわり、各種研修会など)  
 課題を解決する(例:教務・カリキュラム、高等教育調査・研究WGなど)

授業アンケートの目的は何か?  
 その目的は十分に果たされているか?  
 他の取組と授業アンケートはどのように関係しているのか?  
 例:建学の精神・教学の理念・3つのポリシー、シラバス、成績評価、(教員評価)

[3] 授業アンケートにおける課題の解決むけた京都産業大学の取組み  
 課題を発見する(例:学部からの報告書、教育支援セでの議論など)  
 課題を共有する(例:FSDS推進WG、学部まわり、各種研修会など)  
 課題を解決する(例:教務・カリキュラム、高等教育調査・研究WGなど)

授業アンケートにかかわる課題をどのように共有し、取り組んでいるか

上記の3つの取組を通して対話を重視した課題共有のアプローチ

「教育支援研究開発」の意義と深化

「~してください」から「手伝わせてください」そして「学ばせてください!」へ

[3] 授業アンケートにおける課題の解決むけた京都産業大学の取組み  
 課題を発見する(例:学部からの報告書、教育支援セでの議論など)  
 課題を共有する(例:学部まわり、FSDS推進WG、各種研修会など)  
 課題を解決する(例:教務・カリキュラム、高等教育調査・研究WGなど)

さまざまな新しい試み

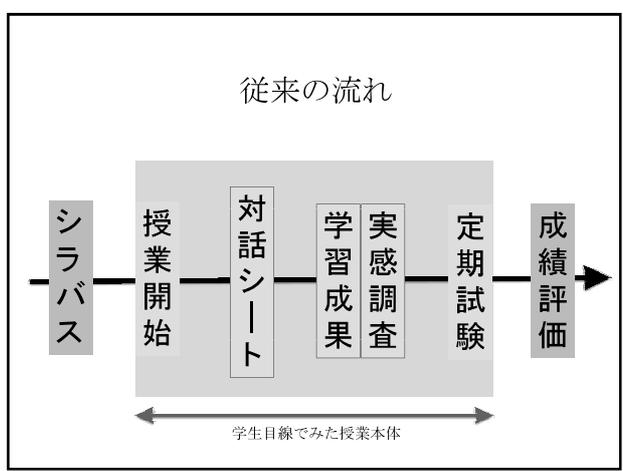
3つのポリシーと連動させたカリキュラム改革、カリキュラム全体像の見える化

京都産業大の学生像を知る量的および質的調査  
 ゼミ・研究室活動の実態調査

学びのポートフォリオ、ルーブリック、ラーニングコモンズ

学生FDスタッフが企画・実施する  
 学生・教員・職員の相互ディスカッション

# さいごに 指導成果を実感するために



学習成果の実感度を知るための従来の要素

- ・授業に主体的に取り組むことができたか
- ・よく学び、よくわかったか
- ・教員とのコミュニケーションがうまくとれたか
- ・楽しかったか
- ・充実した時間を過ごせたか などなど

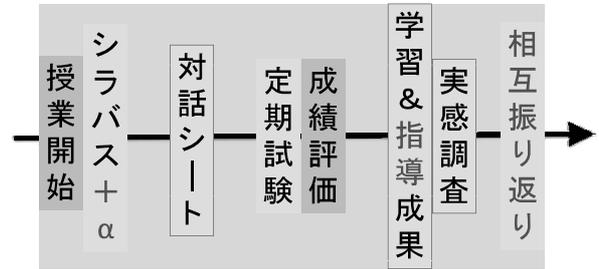
→ 大部分が主観的要素（成績判定前）

新しく盛り込みたい要素

- ・成績（試験のスコアなど）
- ・教員による授業全体の振り返り
- ・学生による成績判定前後それぞれにおける振り返り

→ 客観的要素の導入、調査時期を変える必要性

未来イメージ



# 授業評価アンケートから授業アンケートへ ～京都外国語大学の取り組み～

京都外国語大学 外国語学部 スペイン語学科 准教授 岡本 信照

## 授業評価アンケートから 授業アンケートへ ～京都外国語大学の取り組み～

京都外国語大学外国語学部スペイン語学科 岡本 信照

### 2013年度以前(現行)の授業評価アンケート

- 形式: マークシート方式と自由記述式
- 開始年: 2003年(2007年に設問の見直しを実施)
- 回数: 年1回
- 対象: 大学・短期大学の必修・選択・ゼミを含む全科目
- 実施時期: 必修科目・ゼミ科目 → 6月下旬  
選択科目 → 11月下旬～12月上旬
- 実施・回収率: 大学 → 約99%(2013年度)  
短期大学 → 100%(2013年度)
- 平均回答率: 約70%

### 現行アンケートのフィードバック方法

#### マークシート方式 → 原則公開

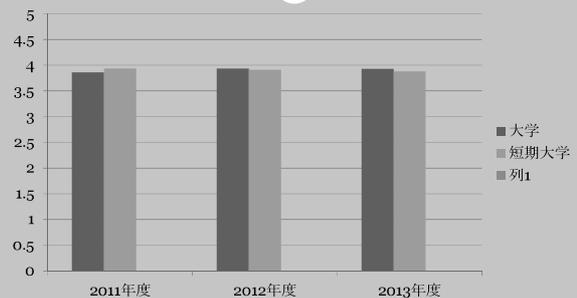
- 実施1ヶ月後、集計結果を書面で各担当教員に返却
- 大学HPのweb campusにアップ(受講生への公開/非公開は選択できるが、大学としては公開を推奨)
- 閲覧できるのは当該科目の教員・受講生のみ
- 閲覧期間は年度内に限定
- 教員による集計結果へのコメント書き込み可

#### 自由記述式 → 非公開

- 実施後、第三者を介さず持ち帰り

※ 全体の集計結果は毎年に冊子にして教職員に配布

### 過去3年の満足度平均(5段階)



2014年度から本学では改訂カリキュラムを実施。

この動きに伴って、改めてアンケート内容を見直してみると……

### 現行アンケートへの問題提起(資料1参照)

- 担当教員のモラルを問うことに今更意味があるのか?  
例、Q5「対応は平等か?」、Q7「定刻どおり行われたか?」
- 担当教員個人の力量に帰されない問いは理不尽では?  
例、Q8「ふさわしい雰囲気維持」、Q11「進路との関連」
- 複合的な問い方は答えにくいのでは?  
例、Q5「対応は、適切かつ平等でしたか?」
- 本来の授業目標に直結する問いがあまり見られないのでは?  
例、目標到達度、進度の適性、受講生の自助努力など



次のような認識は、健全と言えるでしょうか？

- アンケートは人気投票？
- アンケートは監視カメラ？
- アンケートは人事資料？

アンケートに対する過剰な認識や点数結果のみの一人歩きは疑問・・・

## では、授業アンケートとは？

- 授業スキル向上のためのデータ
- 受講生の当該授業に対する意識調査
- 授業を振り返る機会

## アンケートを回答者(受講生)側からみると？

• 受講生が授業に対して堂々と意見できる唯一の機会として不可欠である。

⇒ 教育を受ける側の権利の保障

• されど、全科目対象となっている以上、回答者側にとって負担でもある

⇒ 形態はシンプルのほうが良い

## アンケート改訂の原則

- 1) 授業目標到達度を問うことを主眼とする。
- 2) 一問一答のシンプルな問いに統一する。
- 3) 回答の文言をもう少し緩やかなものにする。
- 4) モラルに関する問いを廃止する。
- 5) 授業スキルに関する問いを増やす。
- 6) 受講生の自省を促す問いを設ける。
- 7) 「社会的・職業的自立に必要な能力」として向上したと思うものを問う項目を設ける。
- 8) 自由記述式は継続する(フィードバックは現行通り)。

## 原則に従い、次のように変更(資料2参照)

- 原則 1), 2), 3), 4)に基づいて・・・ ⇒ Q1~Q6  
→ 講義目標と到達度の継続的確認と意識づけに繋がれば理想
- 原則 5)に基づいて・・・ ⇒ Q7~Q9  
→ 毎年のレベル設定にとって重要
- 原則 6)に基づいて・・・ ⇒ Q11~Q13  
→ 一方的な講義形態から自主的な参加形態への移行を促進する以上、受講生の取り組み姿勢も問うべき
- 原則 7)に基づいて・・・ ⇒ 「向上したと思うものに2つまでマーク」  
→ キャリア教育を見据え、副産物効果を問う試み

## 期待される効果

- 到達目標の意識化を図れる(学習目的の明確化が学力向上に繋がる)。
- 受講生の自省を促すことで、積極性を引き出す。
- 授業アンケートに対する不健全なイメージを払拭する。
- 授業の副次的効果を知ることができる。

## おわりに

○  
～授業を「評価」するためのアンケートを脱却し、  
授業を「振り返る」ためのアンケートへ～

### 《アンケートの前提》

- ・ 教員・受講生の信頼関係

### 《アンケートの目的》

- ・ 教授者側の授業スキルの向上
- ・ 受講者側の積極的な取り組み姿勢の促し

<ご清聴ありがとうございました。>

(資料1) 2013年度までのマークシート式アンケート (授業に直接関係する部分のみ抜粋)

あなたのこの授業への出席率は何の程度でしたか?

90%以上	70~80%台	50~60%台	30~40%台	20%以下
-------	---------	---------	---------	-------

Q1~14の質問に5~0のマークをしてください。

		強 く そ う 思 う	そ う 思 う	ど ち ら と も 言 え な い	そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い	該 当 し な い
Q1	この授業の「講義概要」で示された内容は、授業を受けるうえで役に立ちましたか?	5	4	3	2	1	0
Q2	教員の説明は聞き取りやすく、わかりやすいものでしたか?	5	4	3	2	1	0
Q3	この授業で用いられた教材は、授業の理解に役立ちましたか?	5	4	3	2	1	0
Q4	この授業に対する教員の熱意は感じられましたか?	5	4	3	2	1	0
Q5	学生の質問や発言に対する教員の対応は、適切かつ平等でしたか?	5	4	3	2	1	0
Q6	教員が示した成績評価の方法は、理解できましたか?	5	4	3	2	1	0
Q7	この授業はほぼ定刻どおりに行われていましたか?	5	4	3	2	1	0
Q8	この授業では学習にふさわしい雰囲気が保たれていましたか?	5	4	3	2	1	0
Q9	この授業と他の授業科目との関連は感じられましたか?	5	4	3	2	1	0
Q10	この授業は、新しい知識・技能の習得に役立ちましたか?	5	4	3	2	1	0
Q11	この授業はあなたの進路を考えるうえで参考になりましたか?	5	4	3	2	1	0

ここからは、質問の下に記載されている基準で回答してください。

Q12	この授業の難易度は適切でしたか? 5. 難しすぎる 4. やや難しい 3. 適切 2. 易しい 1. 易しすぎる	5	4	3	2	1	0
Q13	この授業の課題分量はあなたにとって適切でしたか? 5. 多すぎる 4. やや多い 3. 適切 2. やや少ない 1. 少なすぎる	5	4	3	2	1	0
Q14	この授業に対するあなたの満足度はどのくらいですか? 5. 非常に満足 4. 満足 3. どちらとも言えない 2. 不満 1. 非常に不満	5	4	3	2	1	0

(資料 2) 2014 年度以降改訂のマークシート式アンケート (授業に直接関係する部分のみ抜粋)

Q1～10の授業内容や授業方法などに関する質問に  
5～1のマークをしてください。

		そ う 思 う	思いど うえち ばら そか うと	いど えち なら いと も	思いど わえち なばら いそか うと	なそ いう 思 わ
Q1	この授業で示された講義目標は理解できましたか?	5	4	3	2	1
Q2	この授業の評価方法は理解できましたか?	5	4	3	2	1
Q3	この授業で用いられた教材は、授業の理解に役立ちましたか?	5	4	3	2	1
Q4	教員の説明はわかりやすいものでしたか?	5	4	3	2	1
Q5	学生の質問に対する教員の対応は適切でしたか?	5	4	3	2	1
Q6	この授業は、新しい知識・技能の習得に役立ちましたか?	5	4	3	2	1

ここからは、質問の下に記載されている基準で回答してください。

Q7	この授業の難易度は適切でしたか? 5. 難しい 4. やや難しい 3. 適切 2. 易しい 1. 易しい	5	4	3	2	1
Q8	この授業の課題分量はあなたにとって適切でしたか? 5. 多い 4. やや多い 3. 適切 2. やや少ない 1. 少ない	5	4	3	2	1
Q9	この授業の進度はあなたにとって適切でしたか? 5. 全般的に速い 4. 速いと感じることがある 3. 適切 2. 遅いと感じることがある 1. 全般的に遅い	5	4	3	2	1
Q10	この授業に対するあなたの満足度はどのくらいですか? 5. 満足 4. どちらかと言えば満足 3. どちらとも言えない 2. どちらかと言えば不満 1. 不満	5	4	3	2	1

Q11～Q13の自身に関する質問に5～1のマークをしてください。

Q11	あなたのこの授業への出席率ほどの程度でしたか? 5. 毎回出席 (欠席0回) 4. ほぼ出席 (欠席1～3回) 3. 全体の3分の2程度 (欠席4～5回) 2. 全体の3分の2から半分程度 (欠席6～7回) 1. 全体の半分程度 (欠席8回以上)	5	4	3	2	1
Q12	あなたのこの授業に関する教室外での取り組み (自宅・通学时等における予習または復習) ほどの程度でしたか? 5. 必ず予習または復習をしていた 4. 予習または復習をすることが多かった 3. 予習または復習を時々していた 2. 試験直前だけ復習をしていた 1. 予習も復習も全くしなかった	5	4	3	2	1
Q13	あなたはこの授業の講義概要に示された講義目標に、どの程度到達したと思いますか? 5. 十分に到達できた 4. ある程度まで到達できた 3. どちらとも言えない 2. あまり伸びなかった 1. 全く伸びなかった	5	4	3	2	1

この授業で向上したと思われる能力に1～9のマークをしてください (2つまで)。

1. 問題発見力・解決力	4. 主体的に取り組む力	7. プレゼンテーション力
2. 思考力・判断力	5. 計画力・実行力	8. コミュニケーション力
3. 創造力・企画力	6. 情報収集力・分析力	9. 多文化共生力



# 建学の精神「礼節・勤労」に基づいた新たな質保証システムの構築

宮崎学園短期大学 学長補佐 教授 山下 恵子

## 1. はじめに

学校法人宮崎学園（大坪久泰理事長）は、今年創立 75 年を迎える。学園の建学の精神「礼節・勤労」は、今なお連綿と教育の根幹を成している。宮崎学園短期大学（山下忍学長）は、昭和 40 年（1965 年）宮崎女子短期大学（保育科定員 80 人）として、宮崎市清武町に設立され、平成 20 年（2008 年）の男女共学化に伴って宮崎学園短期大学に改称した。創立 49 年を迎える本学には、「保育科」、「初等教育科」、「音楽科」、「人間文化学科」そして「専攻科（福祉専攻・音楽療法専攻）」がある。4 学科の収容定員は 760 人である。

本学では、平成 10（1998）年度より「日本一の地方短大」を目指す FD 活動に取り組み、FD ミーティング（毎月 1 回）、授業評価アンケート、教員相互の授業参観と授業研究会などを 15 年間実施してきた。そのような継続的实践の中で、平成 24 年（2012 年）度に短期大学基準協会による二巡目の第三者評価を受けたが、この機会に、全教職員が一丸となって、教育の質保証に向けた、新たな評価システム構築に取り組んだ。

本発表では、FD 活動から発展し、第三者評価推進委員会、FD・SD 推進委員会、自己点検・評価委員会が相互に連携して行った、建学の精神「礼節・勤労」に基づいた学習成果の測定、評価システムの構築に焦点を当てて報告する。更に、システム構築後の課題についても言及したい。

## 2. 宮崎学園短期大学における FD 活動

(1) 実践内容（表 1. 宮崎学園短期大学の FD 活動一覧参照）

表 1. 宮崎学園短期大学の FD 活動一覧

FD 活動の内容	実施時期
①学生の名前入り顔写真一覧の作成と配布	4 月
②FD 宣言（各教職員・各組織）の設定と評価（中間評価・総括評価）	4 月、9 月、3 月
③月別 FD 目標の設定（毎月）	4 月～3 月
④FD ニュース執筆と発行（毎月）	4 月～3 月
⑤FD ミーティングの企画と実施（毎月）	4 月～3 月
⑥相互授業参観の企画と実施	5 月～1 月
⑦授業参観後の授業研究会の企画と実施	5 月～1 月
⑧FD 研修会の実施	7 月
⑨学生による授業評価アンケートの計画と実施	7 月～9 月、12 月～2 月
⑩『教育研究』誌の発行（全教員執筆）	3 月
⑪卒業時満足度アンケートの計画と実施	3 月

⑫授業研究発表会の企画と運営	3月
⑬『本学教育の充実を目ざして』誌の発行 (学生による授業評価アンケートのまとめ)	3月

(2) 授業評価アンケート結果 (表2. 授業評価アンケート結果参照)

表2. 授業評価アンケート結果

アンケート項目	過去5年間の 平均値	2012 年度
1. 私はこの授業にきちんと出席し、熱心に取り組んだ。	4.5	4.5
2. 先生は授業の学習目標をわかりやすく、はっきり示していた。	4.6	4.6
3. 授業の内容は興味深く、気づかされたり、考えさせられることが多かった。	4.6	4.6
4. 授業は重要なポイントが明確で、わかりやすかった。	4.5	4.6
5. 先生は、学生が理解できるよう授業に周到な準備をし、授業方法を工夫していた。(2011年度より追加設定)	4.6	4.6
6. 先生の声は明瞭で聞き取りやすかった。	4.8	4.7
7. 先生は、学生の反応をしっかり受け止め、必要なときは適切な指導・助言をしてくれた。(2011年度より追加設定)	4.6	4.7
8. この授業を受講してよかった。	4.7	4.7
9. シラバス・授業科目内容の授業目標は達成された。	4.6	4.6
単純平均値(1を除く)	4.6	4.6

<評価は5段階評価である：5大いにそうだ 4ややそうだ 3どちらともいえない

2ややそうではない 1全くそうではない>

なお、授業評価アンケートは、表2に記したアンケート項目にプラスして自由記述式の部分を設定している。自由記述式では、「①この授業のどの点が良かったと思いますか。②この授業について、もっとこうしてほしいなどの要望があれば書いてください。③あなた自身の授業への取り組みの様子や授業についての感想など、自由に書いてください。」という3項目についての回答欄を設けている。アンケート実施後、各教員は、担当科目毎に数値の集計、自由記述式の集約をし、コメントを付けて結果を委員会へ提出する。その後、委員会では、各学科及び全学的平均値を出す。これらは『本学教育の充実を目ざして』の冊子にまとめられ、学内外に公表している。

3. 建学の精神「礼節・勤労」に基づいた学習成果の測定・評価システムの構築 (図1. 測定・評価システム構築図参照)

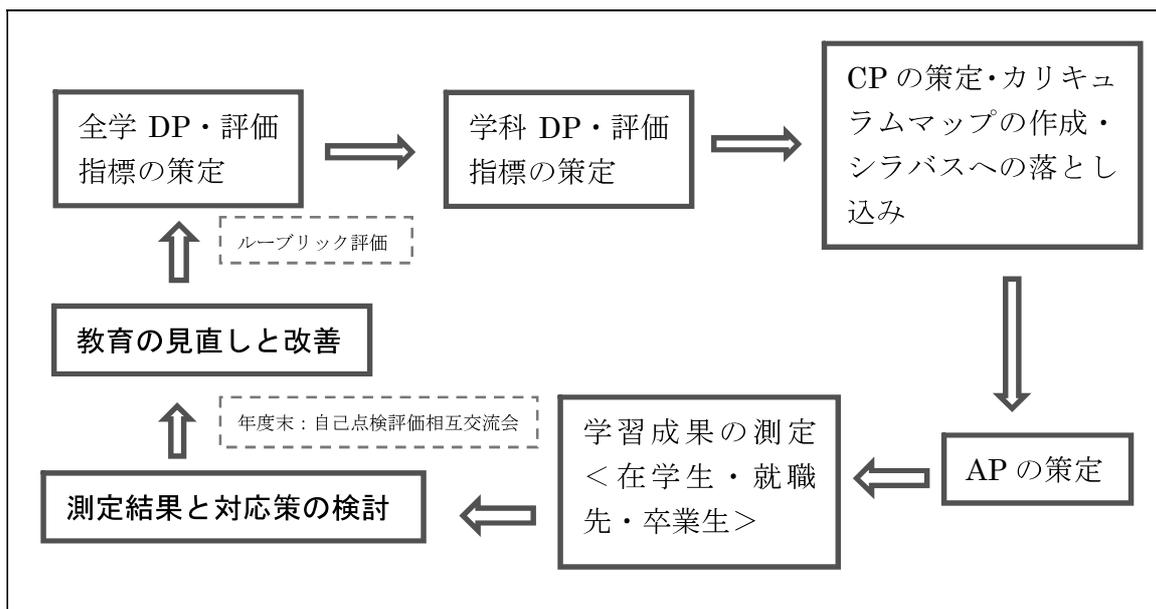


図1. 測定・評価システム構築図

#### 4. 宮崎学園短期大学全学 DP

- I 自他を大切にし、礼儀正しく行動できる。 (礼節、人間尊重の精神)
- II 自己と環境をより良くできる。 (勤労、問題解決力)
- III 適切に情報を集め、しっかり考え、それを分かりやすく説明できる。 (リテラシー)
- IV 多様な人々とコミュニケーションをとり、協力できる。 (協働力)
- V 大学で学ぶ専門的知識や技能を実際場面に活用できる。 (実践力)

#### 5. 全学 DP 評価指標の策定 《32 指標と 3つのレベルの設定》

(ルーブリック評価) (表3. 全学 DP 評価指標と 3つのレベル例参照)

表3. 全学 DP 評価指標と 3つのレベル例< I 自他を大切にし、礼儀正しく行動できる >

指標	レベル1 (他律的レベル)	レベル2(自律的レベル)	レベル3(貢献的レベル)
a. 授業にふさわしい服装など TPO にふさわしい服装に努めている。	服装や身だしなみについて他者に促されて気づき改めることができる。	学生として清潔感溢れるさわやかな身だしなみができる。	常に場にふさわしい落ち着きと清潔感溢れる清楚な姿で、他者のモデルとなることができる。
b. 公共の場所 (交通機関・食堂など) にふさわしい行動を心がけている。	公共におけるマナーや規則を守って行動しなければならないことを理解している。	自己中心的な言動を慎み、他者に不快感を与えないよう心がけ、公共の場にふさわしい行動ができる。	落ち着いた心ある行動をするとともに、周囲への気配りもでき、他者のモデルとなることができる。

## 6. 学科 DP・評価指標の策定 《4つの学科 DP と 23 の評価指標設定》

(表4. 学科 DP と評価指標例参照)

表4. 学科 DP と評価指標例

保育科 DP	評 価 指 標
① 保育者としての社会的使命と責任を自覚し、専門的な知識・技術の習得に努め、常に自己の資質向上に努めることができる。	保育の社会的ニーズや保育士の役割を理解できる a
	保育者の使命について、具体的に説明することができる。 b
	ボランティア・実習を通して、保育者としての資質向上に努めることができる。 c
	保育者の職業倫理を説明できる。 d
	子どもの最善の利益を考えることができる。 e
	主体的に授業や行事に参加し、保育の知識や技術を身に付けようとしている。 f
	保育者の倫理観や専門性を向上させようと努力することができる。 g
	保育者としての自分の強み、弱みを把握し、向上の方策を立てている。 h

## 7. CP の策定・カリキュラムマップの作成・シラバスへの落とし込み

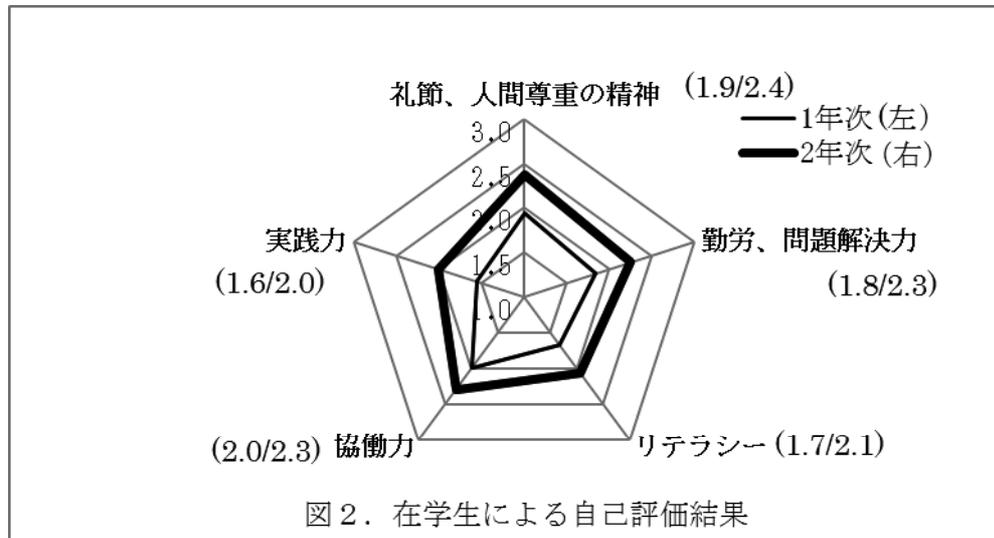
(表5. シラバス例参照)

表5. シラバス例

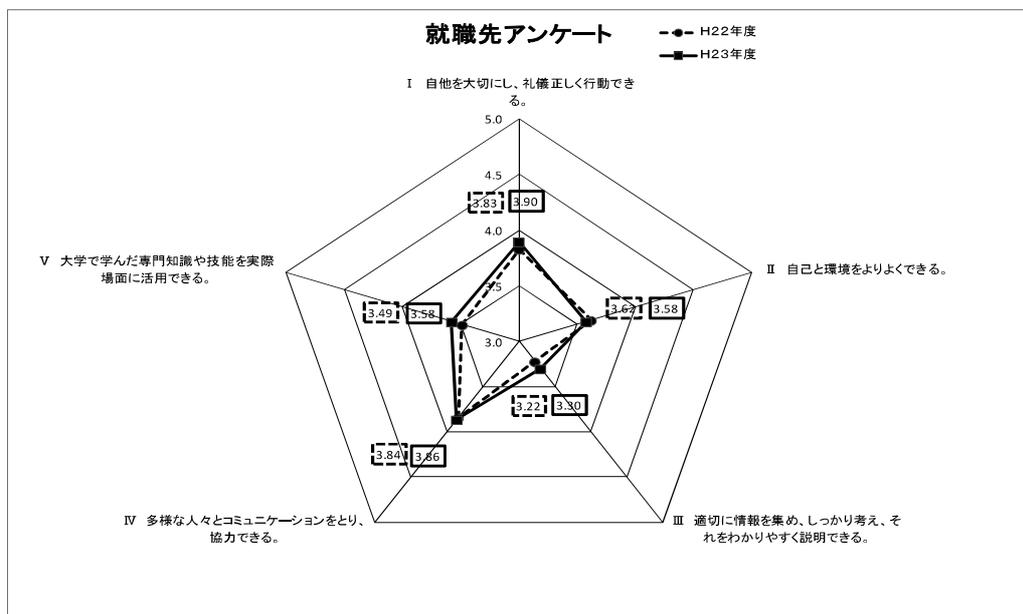
授業科目名	こども音楽療育概論										
担 当 者	山下 恵子										
授 業 対 象	保育科 初等教育科	開講時期	2年前期	授業の種類	講義	単位数	2 単 位				
授業目標	障がいのあるこどもの音楽療育に関する基礎・専門知識について学習する。心身の発達過程と音楽的発達との関係、音楽と遊びとの関係、音楽療育の意義と障害種別の具体的援助方法について学ぶ。										
DPとの 関わり	全学DP					学科DP				コース 目標	
	I	II◎	III	IV◎	V◎	①	②◎	③◎	④◎	(1)	(2)
評価指標	障害のあるこどもの音楽療育の基本的理念を説明することができる。心身の発達過程と音楽的発達との関係、音楽と遊びとの関係、更に、障がい種別の具体的援助方法を説明することができる。 IVabc Vabce ④bf										
授 業 計 画 表											
回	トピック名	概要				授業外学習の内容					
1	オリエンテーション	授業目標及び本授業の到達目標を確認する。				シラバスを読み、授業の流れを理解する。					
2	心身の発達と音楽的発達①	0・1歳児の心身の発達と音楽的発達、遊びとの関係について学ぶ。				0・1歳児の心身発達の宿題プリントを提出する。					

## 8. 全学 DP の測定

(1) 在学生による自己評価 (図2. 在学生による自己評価結果参照)



(2) 就職先アンケートによる評価 (図3. 就職先アンケートによる評価結果参照)



## 9. 学科 DP の測定 (表 6. 学科 DP の測定例)

表 6. 学科 DP の測定例

保育科 DP	評価指標	評価指標に対応する科目					1 年次 自己評価
		人間の 研究Ⅱ 「勤 労」	保育 内容 の研 究表 現	保育 内容 総論	地域 子育 て支 援	教職 概論	
①保育者としての社会的使命と責任を自覚し、専門的な知識・技能の習得に努め、常に自己の資質向上に努めることができる。	保育の社会的ニーズや保育士の役割を理解できる a		○	○	○	○	1 2 3 4 5
	保育者の使命について、具体的に説明することができ、またそのやりがいを説明できる。 b		○			○	1 2 3 4 5
	ボランティア・実習を通して、保育者としての資質向上に努めることができる。 c	○	○				1 2 3 4 5

## 10. 学科 DP の測定結果<自己評価と成績評価> (表 7. 学科 DP 測定結果例参照)

表 7. 学科 DP 測定結果例

	保育科学科 DP	1 年次 自己評価	2 年次 自己評価	教員による 成績評価※
保 育 科	①保育者としての社会的使命と責任を自覚し、専門的な知識・技術の習得に努め、常に自己の資質向上に努めることができる。	3.6	4.0	81.8
	②子ども発達段階や個性を理解し、保育を計画・実践・記録し、子どもに適切な援助や支援を行うことができる。	3.5	4.0	81.9
	③同僚・保護者・地域の人々と良好な人間関係を築き、相手を尊重したコミュニケーションをとることができる。	3.8	4.1	82.6

※教員による成績評価は、評価指標に対応する科目の平均点を算出した。

## 11. 今後の課題について

これらの評価活動を通して、現在本学が抱える課題は、大きく以下の 3 点である。第一は、学生のリテラシー能力の向上である。そのためには、授業外学習をいかに定着させるかということが課題となっている。第二は、専門科目のナンバリング及びカリキュラムツリー作成による授業内容の再構築である。系統的な学習のためには、開講時期及び内容の再検討が不可欠となっている。第三は、分散型データ管理から IR へ

の移行である。入学前から卒業後までのデータを追跡分析研究し、全学的に教育の質向上を目指す統合機能を持つ IR 推進室を設置準備中である。IR 推進室では、教員と事務職員、各部、委員会との協働を目指している。

## 12. おわりに

本学における教育の質向上に向けた取組みは、FD 活動からスタートして 15 年が過ぎた。二巡目の第三者評価に向けて行った 2 年間の自己点検・評価活動は、建学の精神「礼節・勤労」に基づいた学習成果の新たな評価システム構築への取組みとなったが、その模索、検討した過程こそ本学教育の充実を目指した教職員が一丸となつての取組みとして大変意義深いものとなった。第三者評価を通して、建学の精神「礼節・勤労」が本学教育の根幹であることを再認識し、高きを目指して教育に立ち返ることの必要性を学んだ。更に、教育の質保証に向けては、不断の点検・評価・改善が不可欠であることも再認識した。

現在、システム構築後 1 年が過ぎ、分化された機能を統合する必要性を感じ、IR 推進室の立ち上げ準備中である。

学生のリテラシー能力の向上という課題を抱えながら、宮崎の地で、「日本一の地方短大」を目指し、地域社会に貢献できる学生を育成するべく、今後も努力し続けていきたいと思う。

このような機会を頂戴できましたことに心より感謝を申し上げます。

### <参考文献>

- 財団法人短期大学基準協会 『短期大学評価基準 平成 22 年 7 月改定』 2010  
財団法人短期大学基準協会 『自己点検・評価報告書作成マニュアル  
平成 22 年 9 月改定』 2010
- 中井俊樹 他 『大学の IR Q&A』 2013 玉川大学出版部  
山田礼子 『学士課程教育の質保証へむけて』 2012 東信堂  
リチャード D. ハワード 『IR 実践ハンドブック』 大学評価・学位授与機構 IR 研究会  
訳 2012 玉川大学出版部

## 建学の精神「礼節・勤労」に基づいた 新たな質保証システムの構築

山下恵子(宮崎学園短期大学)



## 「学校法人 宮崎学園」 創立74年

大坪 久泰 理事長

昭和14年(1939年)、宮崎女子商業学院、宮崎高等裁縫女学校として、宮崎市に故大坪資秀前理事長によって設立。

建学の精神「礼節・勤労」

宮崎国際大学  
宮崎学園短期大学  
宮崎学園中学校・高等学校  
宮崎学園短期大学附属みどり幼稚園  
宮崎学園短期大学附属清武みどり幼稚園



宮崎学園短期大学

## 宮崎学園短期大学 創立48年

山下 忍 学長

昭和40年(1965年)、宮崎女子短期大学(保育科定員80人)として、宮崎市清武町に設立。

平成20年(2008年)、宮崎女子短期大学を男女共学として宮崎学園短期大学に改称。

「保育科」「初等教育科」「音楽科」「人間文化学科」  
「専攻科(福祉専攻・音楽療法専攻)」

## 「日本一の地方短大」を目指す FD活動

＜平成10年度より取組み開始＞

FDミーティング、授業評価アンケート、教員相互の授業参観と授業研究会など

→ 学習成果の測定・評価システム  
教育の質保証に向けた、新たな  
評価システム構築

## 宮崎学園短期大学における 13種類のFD活動

- ① 学生の名前入り顔写真一覧の作成と配布
- ② FD宣言(各教職員・各組織)の設定と評価(中間評価・総括評価)
- ③ 月別FD目標の設定(毎月)
- ④ FDニュース執筆と発行(毎月)
- ⑤ FDミーティングの企画と実施(毎月)

宮崎学園短期大学における  
13種類のFD活動

- ⑥相互授業参観の企画と実施
- ⑦授業参観後の授業研究会の企画と実施
- ⑧FD研修会の実施
- ⑨学生による授業評価アンケートの計画と実施
- ⑩『教育研究』誌の発行(全教員執筆)

宮崎学園短期大学における  
13種類のFD活動

- ⑪卒業時満足度アンケートの計画と実施
- ⑫授業研究発表会の企画と運営
- ⑬『本学教育の充実を旨として』誌の発行  
(学生による授業評価アンケートのまとめ)

授業評価アンケート結果

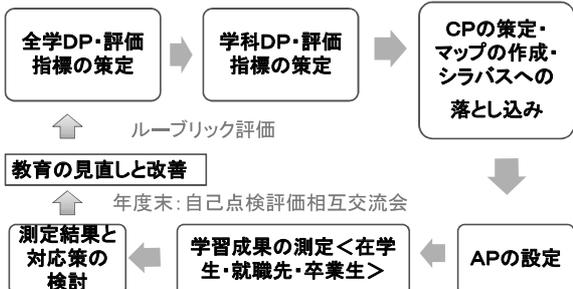
- 1. 私はこの授業にきちんと出席し、熱心に取り組んだ。(4. 5)
- 2. 先生は授業の学習目標をわかりやすく、はっきり示していた。(4. 6)
- 3. 授業の内容は興味深く、気づかされたり、考えさせられることが多かった。(4. 6)
- 4. 授業は重要なポイントが明確で、わかりやすかった。(4. 5)
- 5. 先生は、学生が理解できるよう授業に周到な準備をし、授業方法を工夫していた。(4. 6)

宮崎学園短期大学におけるFD活動

- 6. 先生の声は明瞭で聞き取りやすかった。(4. 8)
  - 7. 先生は、学生の反応をしっかり受け止め、必要なときは適切な指導・助言をしてくれた。(4. 6)
  - 8. この授業を受講してよかった。(4. 7)
  - 9. シラバス・授業科目内容の授業目標は達成された。(4. 6)
- 単純平均値(1を除く)(4. 6)



建学の精神「礼節・勤労」に基づいた  
学習成果の測定、評価システムの構築



## 全学DPの策定

<宮崎学園短期大学の学位授与の方針(全学DP)>

- I 自他を大切にし、礼儀正しく行動できる。  
(礼節、人間尊重の精神)
- II 自己と環境をより良くできる。(勤労、問題解決力)
- III 適切に情報を集め、しっかり考え、それを分かりやすく説明できる。(リテラシー)
- IV 多様な人々とコミュニケーションをとり、協力できる。  
(協働力)
- V 大学で学ぶ専門的知識や技能を実際場面に活用できる。  
(実践力)

## 全学DP評価指標の策定

《32指標と3つのレベルの設定》(ルーブリック評価)

### I 自他を大切にし、礼儀正しく行動できる。(礼節、人間尊重の精神)

指標	レベル1	レベル2	レベル3
a. 授業にふさわしい服装などTPOにふさわしい服装に努めている。	服装や身だしなみについて他者に促されて気づき改めることができる。	学生として清潔感溢れるさわやかな身だしなみができる。	常に場にふさわしい落ち着いた清潔感溢れる清楚な姿で、他者のモデルとなることができる。
b. 公共の場所(交通機関・食堂など)にふさわしい行動心がけている。	公共におけるマナーや規則を守って行動しなければならないことを理解している。	自己中心的な言動を慎み、他者に不快感を与えないよう心がけ、公共の場にふさわしい行動ができる。	落ち着いた心ある行動をするとともに、周囲への気配りもでき、他者のモデルとなることができる。

## 学科DP評価指標の策定(例:保育科)

保育科DP	評価指標
①保育者としての社会的使命と責任を自覚し、専門的な知識・技術の習得に努め、常に自己の資質向上に努めることができる。	保育者の社会的ニーズや保育士の役割を理解できる a 保育者の使命について、具体的に説明することができ、またそのやりがいも説明できる。b ボランティア・実習を通して、保育者としての資質向上に努めることができる。c 保育者の職業倫理を説明できる。d 子どもの最善の利益を考慮することができる。e 主体的に授業や行事に参加し、保育の知識や技術を身に付けようとしている。f 保育者の倫理観や専門性を向上させようと努力することができる。g 保育者としての自分の強み、弱みを把握し、向上の方策を立てている。h

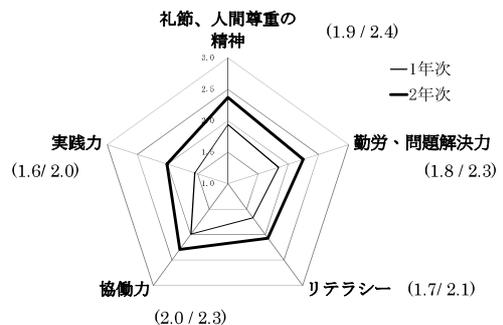
## シラバス

授業科目名	こども音楽療育概論						
科目							
担当者	山下 恵子						
授業対象	保育科 初等教育科	開講時期	2年前期	授業の種類	講義	単位数	2単位
授業目標	障がいのあるこどもの音楽療育に関する基礎・専門知識について学習する。心身の発達過程と音楽的発達との関係、音楽と遊びとの関係、音楽療育の意義と障害種別の具体的援助方法について学ぶ。						
DPとの関わり	全学DP			学科DP			コースDP
	I	II◎	III	IV◎	V◎	①	②◎
						③◎	④◎
						(1)	(2)
							(3)
評価指標	障害のあるこどもの音楽療育の基本的理念を説明することができる。心身の発達過程と音楽的発達との関係、音楽と遊びとの関係、更に、障がい種別の具体的援助方法を説明することができる。 I abc V abce d bf						
授業計画表							
回	トピック名	概要	授業が学習の内容				
1	オリエンテーション	授業目標及び本授業の到達目標を確認する。	シラバスを読み、授業の流れを理解する。				
2	心身の発達と音楽的発達①	0+1歳児の心身の発達と音楽的発達、遊びとの関係について学ぶ。	0+1歳児の心身発達の書籍プリントを提出する。				

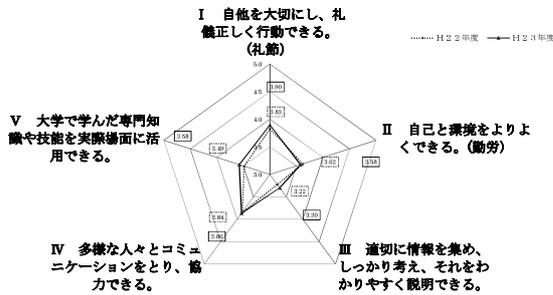
## 全学DPの測定

1. 在学生による自己評価
2. 就職先アンケートによる評価
3. 卒業生アンケートによる評価

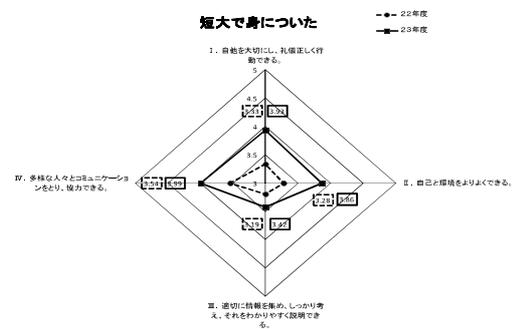
## 全学DPの測定結果(学生の自己評価)



## 全学DPの測定結果(就職先評価)



## 全学DPの測定結果(卒業生の自己評価)



## 学科DPの測定

1. 在学生による自己評価  
(学科DP評価指標の5段階評価 : 対応科目と照合して自己評価)
2. 教員による成績評価  
(学科DP対応科目の平均点を算出)

## 学科DPの策定と測定(保育科の例)

保育科DP	評価指標	評価指標に対応する科目					1年次自己評価
		人間の研究Ⅱ「勤労」	保育内容の研究表現	保育内容総論	地域子育て支援	教職概論	
①保育者としての社会的使命と責任を自覚し、専門的な知識・技術の習得に努め、常に自己の資質向上に努めることができる。	保育の社会的ニーズや保育士の役割を理解できる		○	○	○	○	1 2 3 4 5
②子どもの発達段階や個性を理解し、保育を計画・実践・記録し、子どもに適切な援助や支援を行うことができる。	保育者の使命について、具体的に説明することができ、またやりがいを説明できる。		○			○	1 2 3 4 5
③同僚・保護者、地域の人々と良好な人間関係を築き、相手を尊重したコミュニケーションをとることができる。	ボランティア・実習を通して、保育者としての資質向上に努めることができる。	○	○				1 2 3 4 5

## 学科DPの測定結果(自己評価と成績評価)

	学位授与の方針(学科DP) (自己評価は5段階評価である)	1年次自己評価	2年次自己評価	教員による成績評価
保育科	①保育者としての社会的使命と責任を自覚し、専門的な知識・技術の習得に努め、常に自己の資質向上に努めることができる。	3.6	4.0	81.8
	②子どもの発達段階や個性を理解し、保育を計画・実践・記録し、子どもに適切な援助や支援を行うことができる。	3.5	4.0	81.9
	③同僚・保護者、地域の人々と良好な人間関係を築き、相手を尊重したコミュニケーションをとることができる。	3.8	4.1	82.6

## 今後の課題について

1. 学生のリテラシー能力の向上
2. ナンバリング・カリキュラムツリー作成による授業内容の再構築
3. 分散型データ管理からIRへ  
(データ蓄積・分析・課題対応)

## IR推進室業務について

1. 入学前データ  
(入試結果・アンケート・スクラップ課題・日本語チャレンジ検定)
2. 在学中  
(DP測定・授業評価アンケート・学生生活調査アンケート・卒業時入学満足アンケート)
3. 卒業生・就職先アンケート



## おわりに

<新たな質保証システムを構築して>

1. 建学の精神「礼節・勤労」が根幹であることの再認識。
2. 教職員が一丸となり、「日本一の地方短大」を目指して教育に立ち返ること。
3. 教育の質保証に向けた不断の点検・評価の必要性。
4. 分散型データ管理の統合：  
IR推進室の立ち上げ 



# 教育の内部質保証システムと授業アンケートの関係構築

愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 准教授

山田 剛史

大学コンソーシアム京都 第19回FDフォーラム  
2014. 2/23 (日) 10:00-15:30

論点整理+各報告者へのコメント

## 教育の内部質保証システムと授業アンケートの関係構築

山田 剛史  
愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室  
E-mail : yamada@ehime-u.ac.jp  
Website :

## 授業アンケートはどのようなツールなのか

<3層> 組織 (マクロ)	<機関全体> ・組織全体としての学生のDP・LOの獲得	学生が主語
<2層> カリキュラム (ミドル)	<学部・学科> ・カリキュラムを通じた学生のDP・LOの獲得	
<1層> 授業 (ミクロ)	<教員個人> ・授業アンケートの主なターゲット ・「教員の教授内容・方法の改善」(狭義FD)を支援するツール	

## 授業アンケートは質保証システムの一部となり得るか

- ✓ 組織的に実施はしているが、必ずしも結果は組織的に共有されず、改善も個人に委ねられている。
- ✓ 主として教授(者)中心のロジックで構成されている。
- ✓ 授業アンケートの和集合がカリキュラム評価や質保証システムとイコールではない。
- ✓ 学習成果の集大成がDPやLOとして明示され、そこから必要なカリキュラムや授業が配置される、所謂バックワード型の教育デザインが推奨されている。

## バックワード型の教育デザインとは

図-2 ラーニング・アウトカムズを重視した「学士課程」教育の構築  
川崎大英夫 (2008) ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆 名古屋大学教育研究, 8, 173-191.

## 授業アンケートは質保証システムの一部となり得るか

- ✓ 組織的に実施はしているが、必ずしも結果は組織的に共有されず、改善も個人に委ねられている。
- ✓ 主として教授(者)中心のロジックで構成されている。
- ✓ 授業アンケートの和集合がカリキュラム評価や質保証システムとイコールではない。
- ✓ 学習成果の集大成がDPやLOとして明示され、そこから必要なカリキュラムや授業が配置される、所謂バックワード型の教育デザインが推奨されている。

↓

**組織が掲げる学習成果(目標)を各授業と関連づけ、それを授業アンケートによって把握する**

## 授業アンケートをどのように質保証に接続させるか

授業アンケートを核に据えた教育の質保証システム (PDCAサイクル)

組織 (全体・委員)	個人
<Step1> 組織としての目標設定(P) DP・LOを設定・共有する	<Step2> 個人の目標設定と授業デザイン(P) DP・LOに基づき、授業の達成(到達)目標を見直し、対応付ける
<Step3> 授業アンケートの再検討(D) 授業アンケートに学習者視点を組み込む	↓ <b>授業実施</b> (適宜、診断的・形成的アセスメント)
<Step4> 授業アンケートの分析・評価(C) DP・LOの到達度を把握し、評価する	
<Step5> 結果のフィードバックとカリキュラムデザインの再検討(A) 結果は組織全体と個人双方にフィードバックし、カリキュラムデザインを再検討する	<Step6> 授業デザインの再検討(A) 結果を受け、授業デザインを再検討する

### 授業アンケートをどのように質保証に接続させるか

授業アンケートを核に据えた教育の質保証システム (PDCAサイクル)

組織 (全体・委員)	個人
<b>&lt;Step1&gt;組織としての目標設定(P)</b> DP・LOを設定・共有する	<b>&lt;Step2&gt;個人の目標設定と授業デザイン(P)</b> DP・LOに基づき、授業の達成 (到達) 目標を見直し、対応付ける
<b>&lt;Step3&gt;授業アンケートの再検討(D)</b> 授業アンケートに学習者視点を組み込む	<b>授業実施</b> (適宜、診断的・形成的アセスメント)
<b>&lt;Step4&gt;授業アンケートの分析・評価(C)</b> DP・LOの到達度を把握し、評価する	<b>授業デザインの再検討(A)</b> 結果を受け、授業デザインを再検討する
<b>&lt;Step5&gt;結果のフィードバックとカリキュラムデザインの再検討(A)</b> 結果は組織全体と個人双方にフィードバックし、カリキュラムデザインを再検討する	

### 授業アンケートをどのように質保証に接続させるか

佐藤先生

授業アンケートを核に据えた教育の質保証システム (PDCAサイクル)

組織 (全体・委員)	個人
<b>&lt;Step1&gt;組織としての目標設定(P)</b> DP・LOを設定・共有する	<b>&lt;Step2&gt;個人の目標設定と授業デザイン(P)</b> DP・LOに基づき、授業の達成 (到達) 目標を見直し、対応付ける
<b>&lt;Step3&gt;授業アンケートの再検討(D)</b> 授業アンケートに学習者視点を組み込む	<b>授業実施</b> (適宜、診断的・形成的アセスメント)
<b>&lt;Step4&gt;授業アンケートの分析・評価(C)</b> DP・LOの到達度を把握し、評価する	<b>&lt;Step6&gt;授業デザインの再検討(A)</b> 結果を受け、授業デザインを再検討する
<b>&lt;Step5&gt;結果のフィードバックとカリキュラムデザインの再検討(A)</b> 結果は組織全体と個人双方にフィードバックし、カリキュラムデザインを再検討する	

### 佐藤先生@京産大へのコメント

- 授業アンケートのリニューアル  
「対話」を重視してマイクロとミドルに分割
- 授業デザインの検討材料 (効果検証) に
  - 改めて丁寧な授業実践から言えることは?
  - 実感調査と授業アンケートの関連および活用可能性は?
  - 2つの調査をカリキュラム改善に活用したケースは?

### 授業アンケートをどのように質保証に接続させるか

岡本先生

授業アンケートを核に据えた教育の質保証システム (PDCAサイクル)

組織 (全体・委員)	個人
<b>&lt;Step1&gt;組織としての目標設定(P)</b> DP・LOを設定・共有する	<b>&lt;Step2&gt;個人の目標設定と授業デザイン(P)</b> DP・LOに基づき、授業の達成 (到達) 目標を見直し、対応付ける
<b>&lt;Step3&gt;授業アンケートの再検討(D)</b> 授業アンケートに学習者視点を組み込む	<b>授業実施</b> (適宜、診断的・形成的アセスメント)
<b>&lt;Step4&gt;授業アンケートの分析・評価(C)</b> DP・LOの到達度を把握し、評価する	<b>&lt;Step6&gt;授業デザインの再検討(A)</b> 結果を受け、授業デザインを再検討する
<b>&lt;Step5&gt;結果のフィードバックとカリキュラムデザインの再検討(A)</b> 結果は組織全体と個人双方にフィードバックし、カリキュラムデザインを再検討する	

### 岡本先生@京大へのコメント

- 授業アンケートのリニューアル  
これまでのアンケートの問題点を整理し、改訂の「原則」を定める
- 学習者視点も盛り込んだ内容に  
教員の評価→学生自身の振り返り
  - 結果の活用とフィードバックは?
  - ミドル・マクロとの関連は?
  - 「期待される効果」 (学生の積極性や教員のイメージ払拭等) は得られたのか?

### 授業アンケートをどのように質保証に接続させるか

山下先生

授業アンケートを核に据えた教育の質保証システム (PDCAサイクル)

組織 (全体・委員)	個人
<b>&lt;Step1&gt;組織としての目標設定(P)</b> DP・LOを設定・共有する	<b>&lt;Step2&gt;個人の目標設定と授業デザイン(P)</b> DP・LOに基づき、授業の達成 (到達) 目標を見直し、対応付ける
<b>&lt;Step3&gt;授業アンケートの再検討(D)</b> 授業アンケートに学習者視点を組み込む	<b>授業実施</b> (適宜、診断的・形成的アセスメント)
<b>&lt;Step4&gt;学習成果測定</b> 分析・評価 (適宜、診断的・形成的アセスメント) DP・LOの到達度を把握し、評価する	<b>&lt;Step6&gt;授業デザインの再検討(A)</b> 結果を受け、授業デザインを再検討する
<b>&lt;Step5&gt;結果のフィードバックとカリキュラムデザインの再検討(A)</b> 結果は組織全体と個人双方にフィードバックし、カリキュラムデザインを再検討する	

## 山下先生@宮崎学園短大へのコメント

- FD宣言やFD目標など活動の「指針」を共有
- 「建学の精神」を反映した全学・学科双方でDPを策定し、組織としての一貫性を担保
- 在学生・就職先・卒業生へと様々な対象からDPを測定し、評価・改善活動へ反映
- シラバスにDPとの対応関係を明示
- 各種アンケートの関連は？→IRの可能性
- 教育力向上（AL等）のための方策は？
- カリキュラム改善に活用したケースは？

13

## 最後に：授業アンケートを最大限活用するために

- 授業アンケートは、日本のFDを牽引してきた最も普及率の高い教育改善ツール
- ただし、昨今の大学教育改革で期待される様々な要請に応答するためには、位置づけや内容・構成等、改めて見直す時期に来ている
- その際、何のための授業アンケートなのか？これまで実施してきた問題点は何か？などを比較・分析しつつ明確にする作業が必要
- うまく軌道に乗せるためには、組織的見地から学習者視点に基づき、一貫性と整合性、中立性と客観性を持って臨むことが求められる

14

ご清聴、ありがとうございました。

15